

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

文部科学大臣賞

観水 かんすい

田沼裕樹 たぬまひろき
(千葉県松戸市)

春日訪佳人

春日佳人 しゅんじつ かじん を訪 と う

春風十里路横斜

春風 しゅんぶう 十里 じゅうり 路横斜 みちおうしや

行詠豈輸温八叉

行 ゆく ゆく詠 えい じて 豈 あ に温 おん 八叉 はっさ に輸 ゆ せんや

枕上佳人含笑指

枕上 ちんじょう 佳人 かじん 笑 わら いを含 ふく んで指 ゆびさ す

鬢邊一片著梅花

鬢邊 びんへん 一片 いっぺん 梅 ばい 花 か を著 つ く

〔作者自注〕

春風に吹かれて数キロばかり、ななめに続く道すがら詩を作ること温庭筠（※晩唐の詩人。腕組み一回につき一首、八回で八韻十六句の詩をものしたということから温八叉と呼ぶ）にも負けるものではない。さて、枕べで佳き人が笑みを浮かべて指をついてくる。「あなた、お髪に一ひら、梅の花を咲かせていらしてよ」

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

国民文化祭実行委員会会長賞

沙鷗 一由秀範 (長野県長野市)

御陣乗太鼓

御陣乗太鼓

能州静渚怒漁民

能州の静渚 漁民怒る

鬼面鬚髻占海濱

鬼面 鬚髻 海濱を占む

亂打填填天意響

乱打 填填 天意の響

驚心動魄鎮龍神

驚心 動魄 竜神を鎮めん

〔作者自注〕

(一五七七年) 能州(能登)の静かな漁村(名舟村)の浜辺で、漁民達は敵(上杉軍)の襲来に怒り立ち向かった。樹の皮で作った鬼や亡霊の面に海藻の髪を振り乱しながら、太鼓を打ち鳴らし、敵を追い払った。雷の鳴り響くような音は、天の意志の如く、魂を揺り動かして龍神を鎮めるかのようにであった。転句の「亂打填填」は、序・破・急を表現した。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

石川県知事賞

雄思たけし

中野武なかの たけし (大分県中津市)

晩春

晩春ばんしゅん

昨牽吟杖弄煙霞

昨さくは吟杖ぎんじょうを牽ひいて 煙霞えんかを弄ろうし

今倚窗邊惜落花

今いまは窓邊そうへんに倚よつて落花らっかを惜おしむ

九十韶光芒若夢

九十きゅうじゅうの韶光しょうこう 茫ぼうとして夢ゆめの如ごとし

儘呼妻女靜煎茶

儘まま妻女さいじよを呼よんで靜しずかに茶ちゃを煎にる

〔作者自注〕

昭和六十二年淡窓伝光靈流入会、全日本漢詩連盟誌の中、伊藤竹外先生の、「吟詠家は漢詩を学び又作詩も肝要であろう」との言葉に浅学乍ら道を貫く。

晩春は昨日までは吟杖を手に山水の美しい景に戯れ、今は窓辺に倚つて落花を寂しく眺めるだけ、三ヶ月の春の素晴らしい時期は夢のよう、抛り所無い中で妻を呼び茶を飲み交わし気を取り戻す。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

石川県教育委員会教育長賞 公津三村公二（神奈川県川崎市）

廬山懷古

廬山懷古

突兀群峯春色回

突兀たる群峯 春色回り

香爐瀑布絶塵埃

香爐の瀑布 塵埃を絶つ

昔時仙客逃名住

昔時 仙客 名を逃れて住み

今日行人拾翠來

今日 行人 翠を拾いて來たる

〔作者自注〕

蘇軾が廬山に立ち寄った時の優れた詩は、何故か、陶淵明、李白、白居易に比べてあまり知られていない。庵を構えて移り住まなかったせいではないのかと、地図と写真で四人の詩跡をたどって思いを馳せている。廬山の姿は変わらないのに、今はすっかり観光地化してしまつて、名を逃れて移り住むような人はいない。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

小松市長賞

汀華

水谷奈緒美（愛知県豊田市）

知恩院晩秋

知恩院晩秋

古刹鐘聲隱隱流

古刹の鐘聲 隱隱と流る

秋風蕭索誘羈愁

秋風 蕭索 羈愁に誘ふ

紅楓満目晩淒路

紅楓 満目 晩淒の路

大殿樓頭月一鉤

大殿 樓頭 月一鉤

〔作者自注〕

人々が去った知恩院は、別の世界に居るような幽玄な趣があり、その情景を詠みました。鐘の音が遠く響き、旅愁を誘うように秋風はもの寂しく吹いています。辺り一面紅葉が鮮やかに色づく中、寒とした日暮れの道をゆつくりとひとり歩き、ふと西の空を見上げると、古寺の大殿の上に細い三日月が輝いています。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

小松市市議会議長賞

虚風

村瀬和彦（愛知県名古屋市）

花時春愁

花時春愁

古寺無人日已斜

古寺 人無く 日已に斜めなり

獨攜杖策醉春華

独り杖策を携え 春華に酔う

暮鐘聲裏難歸去

暮鐘 声裡 帰り去り難く

看盡飛花又落花

看尽くす 飛花 又落花

〔作者自注〕

これと違って奇抜な表現はできませんが、日本で昔から賞でられる古寺の散りゆく桜花を一人の翁が暮鐘を聞きつつ愁いに身を置くイメージを想像して作りました。結句で「悲花又落花」と意識的に「花」を重複させて、散りゆく様子をしていねいに表現したつもりです。この度は誠にありがとうございます。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

小松市教育委員会教育長賞

麗華 笠崎洋子（愛媛県松山市）

曝背

背を曝す

陽光暖暖似春晴

陽光暖暖 春晴に似たり

曝背南軒睡意生

背を曝す南軒 睡意生ず

猫亦愛眠閑暇午

猫も亦 愛眠す閑暇の午

無詩無鼠日西傾

詩無く 鼠無く 日西に傾く

〔作者自注〕

一、動機 私の長い人生、何匹かの猫と共に過ごした日々。その一齣を詩にしました。
二、通釈 陽光が燦燦と降り注ぐ閑かな昼下がりに、詩を作りたくなって机の前に座ったのだが、何時の間にもやら居眠りをしてしまった。側に寄ってきた猫も共に眠ってしまった。何時しか陽は傾き、詩は無い、鼠も捕れてないと、最後はメルヘン・チックに結びました。

いしかわ百万石文化祭2023

全国漢詩の祭典

全日本漢詩連盟会長賞

高橋純子たかはしじゆんこ
(東京都杉並区)

曉渡

曉渡ぎょうと

霜風瑟瑟荻蘆洲

霜風そうふう 瑟瑟しつしつ 荻蘆てきろの洲しゅう

野渡無人曉色幽

野渡やと 無人ひとな 曉色ぎょうしよくゆう 幽

獨立鷓鴣不飛去

獨ひとり立たつ鷓鴣ろじ 飛とび去さらず

煙霞横處護虚舟

煙霞えんか 横よこたわる處ところ 虚舟きょしゅうを護まもる

〔作者自注〕

数年前、本で目にした一枚の写真。何故だか頭から離れなくなった。広大な河、誰もいない渡場、一艘の舟。そして、その横にある纜（ともづな）を繋ぐ柱に立つ一羽の鳥。逆光で影絵のようなその鳥は、いつからそこに居るのだろう。まるで小舟の護衛をしているようだ。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

石川県漢詩連盟会長賞

麗岳 柄田幸子（石川県金沢市）

讚白山

白山を讚す

東秘飛泉急瀨湍

東に飛泉を秘め

急瀨湍く

西埋化石夢魂安

西に化石を埋め

夢魂安らかなり

銀峯皎皎春粧好

銀峯皎皎として

春粧好しく

天地熙熙意自寛

天地熙熙として

意自ずから寛なり

「作者自注」

白山のスーパー林道には、幾つもの瀑布が落ち、白峰や勝山にはジュラ紀の化石群が眠っている。どこからも眺められる山巔は真つ白の雪を戴き、春の装いのように美しい。天地は穏やかで、心が自然とのびやかに寛ぐのである。豊かな水は、田畑を潤し、民の生命を守る神として、白山は古代より崇められている。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

北國新聞社社長賞

誠堂 藤本大輔（長崎県佐世保市）

送春絶句

送春絶句

萬紅千紫散如塵

万紅千紫 散じて塵の如し

庭樹交枝緑已勻

庭樹枝を交えて 緑已に勻う

青帝難留人易老

青帝留め難く 人老い易し

閑愁無遣送三春

閑愁遣る無く 三春を送る

「作者自注」

漢詩の応募の時期が春の終わりでしたので「惜春」の侘しさを数詞と色彩を多く用いて描いてみました。千万の多くの花が散り尽くし、塵のようになつております。庭の木々は緑の葉を茂らせております。春を司る神は去つて行き、人々は老いていきます。なんとなく湧き上がる愁いを追い払う事も無く、この春を送つていくのです。

いしかわ百万石文化祭2023 全国漢詩の祭典

NHK金沢放送局局長賞

如蘭 曾雌幸己枝（千葉県我孫子市）

青女染秋

青女秋を染む

訪來古刹白雲溽

訪い來たる古刹 白雲の溽り

青女伴霜楓樹林

青女霜を伴う 楓樹の林

濃淡紅黃秋艶麗

濃淡の紅黃 秋艶麗

鐘聲殷殷夕陽沈

鐘聲殷殷 夕陽沈む

「作者自注」

白雲湧く山中の古刹を訪ねた。霜を運んでくるといふ秋の女神・青女が楓の林にやって来て、濃淡様々な紅や黄に染め上げ、秋たけなわである。折から晩鐘が境内に響きわたり、遠く夕陽が大地に沈んでゆく。

いしかわ百万石文化祭 2023

全国漢詩の祭典

U23 奨励賞 最優秀賞

鷺見愛也華 (岐阜県岐阜市)

新歳

新歳

歸郷正月集田家

歸郷

正月

田家に集ふ

久闊同朋笑語譁

久闊の同朋

笑語譁し

快飲重觴甘酔裏

快飲

觴を重ぬ

甘酔の裏

春風和氣滿窗紗

春風

和氣

窓紗に満つ

〔作者自注〕

この漢詩のテーマは「新年」です。

今年、成人式に出席したことが印象的でした。卒業式ぶりに中学校の同級生や当時の担任の先生と会い、夜は友人とお酒を飲みながら近況報告や思い出話に花を咲かせました。二十歳という節目を迎え、私も大人の仲間入りをしたんだなと嬉しくなりました。そんな充実した一日を思い返しながら作成しました。

いしかわ百万石文化祭 2023

全国漢詩の祭典

U18奨励賞最優秀賞

久保嶺夏（神奈川県鎌倉市）

詠赫夜姫

赫夜姫を詠ず

深秋推戸桂花香

深秋 戸を推せば 桂花香し

蟾影玲瓏満屋梁

蟾影玲瓏 屋梁に満つ

世上難分非我土

世上分かれ難くも 我が土に非ず

想看舊里正茫茫

旧里を想い見て 正に茫茫たり

「作者自注」

今回の漢詩は、私の好きな竹取物語をモチーフに作りました。かぐや姫がどんな事を思っていたかを想像して、それが伝わるようにつくりました。これからも、楽しく漢詩をつくっていかけたらいいなと思っています。最後に、漢詩の楽しさを知れたのも、勧めてくれた父のおかげです。ありがとうございました。